

>> sea



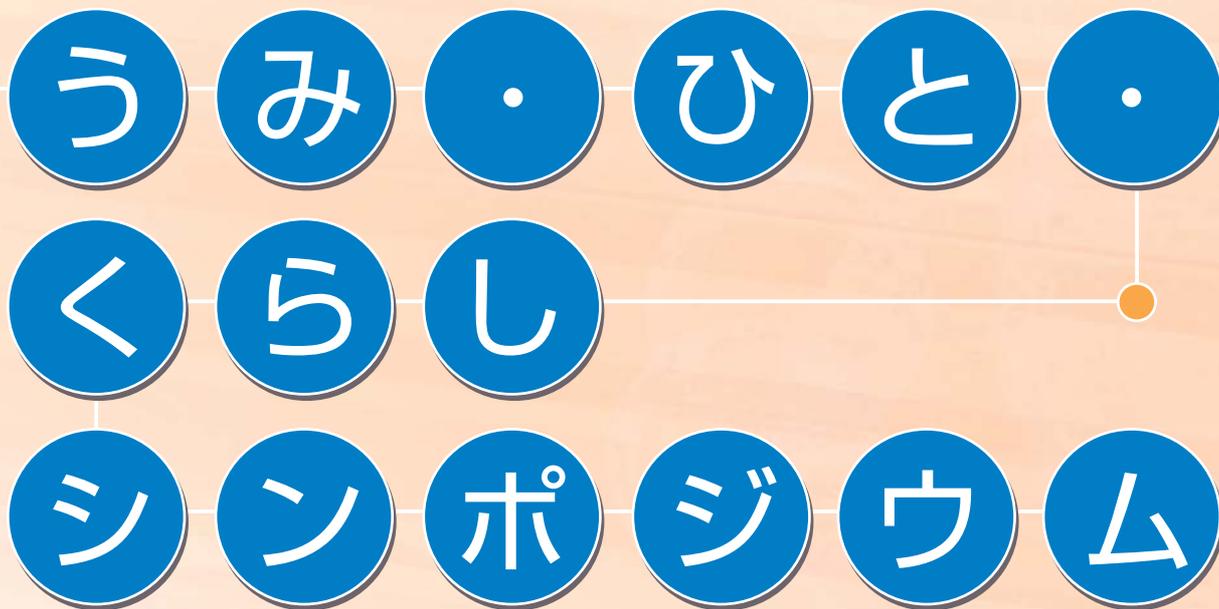
>> people



>> life



うみ・ひと・くらしフォーラム



2017 in 和歌山

●いかに若い人を呼び込むか

●平成29年9月2日(土)~3日(日) 国立大学法人 和歌山大学観光学部

【主催】 うみ・ひと・くらしフォーラム 【共催】 一般財団法人 東京水産振興会、和歌山大学食農総合研究所

【後援】 和歌山県、和歌山県漁業協同組合連合会、なぎさ信用漁業協同組合連合会、東海大学海洋学部、
国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校



●いかに若い人を呼び込むか

ごあいさつ

うみ・ひと・くらしフォーラムは、2003年から有志のグループとして毎年1回、全国の漁村女性グループが集まるシンポジウムを開催し今年で15年目です。この2～3年は、グループ活動を着実に進めてきた人たちが、将来を展望しつつ自分のやりたいことを言葉で表してみようというテーマでシンポジウムを行ってきました。

そのようななかで、今年は「いかに若い人を呼び込むか」というテーマにしました。彼ら呼び込めなければ、1990年前後頃から女性たちが各地で育ててきた活動が止まってしまう恐れも生じてきています。本日は、今まで活動に入っていなかった彼らを巻き込んで、活動をいかに持続させられるか、あるいは新たな展開をさせられるかということについて、一緒に話していきましょう。

うみ・ひと・くらしフォーラム（副島久実）

主催者挨拶

●一般財団法人 東京水産振興会 振興部部长 西本 真一郎

私ども東京水産振興会は、東京築地市場の隣にあります豊海水産埠頭ターミナル基地の管理・運営をしている一般財団法人で、公益を目的とした日本の水産業の発展・振興に関する普及啓発事業と調査研究事業を行っています。この普及啓発事業の中で、日本の漁村女性グループ活動を支援する地域活性化支援事業を行っており、2008年からうみ・ひと・くらしフォーラムと一緒にシンポジウムを開催しています。

今年度のシンポジウムのテーマは「いかに若い人を呼び込むか」です。担い手の不足を含めた課題や問題については、水産業界に限らず他の産業分野でも指摘されています。本日は、パネリストの皆様から話題提供いただき、参加者の皆様と活発に議論をしていただき、課題や問題点を解決できるヒントが得られることを期待しております。参加いただきました漁村女性グループの皆様にとって、活動の活性化につながるきっかけづくりの機会としていただきたいと思います。

共催者挨拶

●和歌山大学食農総合研究所所長 大西 敏夫氏

私ども和歌山大学の食農総合研究所は共催団体の一員として、また、開催地でもある和歌山県、和歌山大学を代表し歓迎の意味を含めて、ごあいさつをさせていただきます。

本日は、北は北海道から南は九州までたくさんの方にご参集いただき、また、本学の会場を利用していただき、感謝申し上げます。この研究所は、昨年4月1日に設置されたばかりです。県内の皆さんと一緒に連携して、食と農に関わる分野の研究活動に携わっています。食と農と言っていますが、実は食と農業、それから林業、漁業、これをひっくるめて食農と呼んでいます。

全国からご参集いただいた農村・漁村女性、それからグループの方々一堂に会して、意見交換をしながら様々な活動に生かす。今日のシンポジウムは、そういう場だと聞いています。シンポジウムのプログラムを拝見し、中身の濃い様々な期待が持てる催しを企画されていると感じました。シンポジウムが非常に有意義なものになりますよう心から祈念して、歓迎のごあいさつとさせていただきます。

参加グループ及び参加者

参加グループ			
和歌山県	JF紀州日高女性部 印南町地区	鹿児島県	垂水市漁業協同組合女性部
和歌山県	和歌山南漁業協同組合 田辺女性部	鹿児島県	奄旨海房 魚匠
和歌山県	和歌山南漁業協同組合 湊浦女性部	鹿児島県	奄美小町
和歌山県	和歌山南漁業協同組合 白浜女性部	鹿児島県	(株)漁師の店 さかな
和歌山県	和歌山南漁業協同組合 すさみ女性部	その他の参加者・参加機関	
和歌山県	新庄漁業協同組合 女性部	和歌山大学食農総合研究所	
和歌山県	和歌山東漁業協同組合 女性部	和歌山大学地域活性化総合センター	
和歌山県	宇久井漁業協同組合 女性部	和歌山大学観光学部	
石川県	輪島・海美味工房	和歌山県水産振興課	
福井県	福井県漁協女性部連合協議会	和歌山県海草振興局	
静岡県	静岡県漁業協同組合女性部連合会	和歌山県日高振興局	
静岡県	浜名っ娘クラブ	和歌山県西牟婁振興局	
三重県	三重県漁協女性部連合会	和歌山県漁業協同組合連合会	
三重県	香良洲漁業協同組合女性部	新庄漁業協同組合(和歌山県)	
三重県	松坂漁業協同組合女性部	JF和歌山女性連	
三重県	三重県漁村女性アドバイザー	なぎさ信用漁業協同組合連合会和歌山支店	
三重県	株式会社梶賀コーポレーション	森岡農園(北海道)	
広島県	広島県漁協女性部連合会	全国漁業協同組合連合会	
広島県	坂町漁業協同組合	福井県農林水産部水産課	
山口県	山口県漁業協同組合安下庄支店女性部	静岡県漁業協同組合連合会指導部漁業振興課	
山口県	山口県漁業協同組合秋穂支所女性部	三重県漁業協同組合連合会	
山口県	山口県漁業協同組合藤曲浦支店女性部	山口県農林水産部農林水産政策課	
山口県	山口県漁業協同組合通支店	山口県防府水産事務所	
山口県	株式会社三見シーマーズ	鹿児島県水産技術開発センター	
高知県	じんべえばばーず	鹿児島県大島支庁 林務水産課	
高知県	すくも湾漁業協同組合柏島加工クラブ	長浜漁業集落(鹿児島県)	
高知県	満天クラブ	奄美市笠利総合支所 産業振興課	
高知県	土佐ひめいち	瀬戸内町 水産振興課	
長崎県	ももたろう	徳之島町 農林水産課	
大分県	合同会社 漁村女性グループめばる	ヤマチョウ(鹿児島県)	
鹿児島県	東町漁協女性部	みなと新聞大阪支社	
鹿児島県	牛根漁業協同組合女性部	東海大学	

プログラム

9月2日(土)	国立大学法人和歌山大学 観光学部(観光学部講義室)		
	■趣旨説明と活動報告(うみ・ひと・くらしフォーラム)		
	■試食会		
9月2日(土)	■みんなでトーク	パネリスト	
		和歌山県漁協女性部連合会(和歌山県)	中本 京子氏
		和歌浦漁業協同組合 女性部(和歌山県)	藪 江津子氏
		長浜漁業集落(鹿児島県)	下野 尚登氏
		全国漁業協同組合連合会 漁政部(東京都)	香取 弘子氏
9月3日(日)	■やぶ新(〒641-0023 和歌山県和歌山市新和歌浦1-1)		
	横田邦雄氏から活動経緯の説明/漁船・網・製氷機等の見学、加工場の視察 和歌浦漁港朝市「おとっとと広場」の見学/シラス丼とかき揚げの昼食		

いかに若い人を呼び込むか

うみ・ひと・くらしフォーラム関、三木、副島は、二〇〇三年から勝手に漁村女性応援団を有志のグループとして活動してきました。毎年一回、全国の方々が集まるシンポジウムを企画し、今年で十五年目になります。

これまで、各地でどういう女性グループが活動しているのか全国を見渡すようなテーマや、どうやって商品を開発するかという絞ったテーマでもやってきました。この二〜三年は、そういうグループ活動を着実に進めてきた人たちが、次にどうするかのために、まず自分で自分のやりたいことを言葉で表してみようというテーマでシンポジウムを開催しています。

そういうなかで、今年はいかに若い人を呼び込むかというテーマにしました。これは、決して新しい問題ではありません。しかしながら、全国の女性グループを引っ張ってきた世代の方々が、六十代、七十代、八十代になってきた現在、自分

たちがやってきた活動をどう次の世代に伝えるか。あるいは、次の世代が集まらなかつたら解散するのかという話がたくさん出てきています。その結果、解散してしまうグループもあれば、一方で実は身近に後継者になる人がいたというグループもあります。あるいは、例えば定年退職者が自分の集落に戻り手伝ってくれたケースもあります。

最近では若い人たちが漁村にぼつぼつと集まって来ているという印象を持っています。今後どうやって、これまでの女性グループの活動とこの若い人たちを、つなげるかということを、あらためて話し合うような場をつくりたいということとで今回、このテーマにしました。

本日のシンポジウムでは、いかに若い人たちを巻き込んでこれまでの女性グループが作ってきた活動を持続・展開をさせられるのかということについて、話をしていきたいと思えます。

うみ・ひと・暮らしフォーラム 年次報告 (2016年9月～2017年8月)



● うみ・ひと・暮らしシンポジウム

静岡	2016年 9月	自分の想いを自分のコトバで —地域とわたしたち—
----	-------------	-----------------------------



● ジャパン・インターナショナル・シーフードショー (東京ビッグサイト)の参加・出展、講演 2017年8月

漁村女性グループめばる、佐賀市漁村の会、牡蠣の家しおかぜの3グループが参加し、輪島海美味工房、土佐ひめいちの2グループが商品のみ参加をしました。

また、うみ・ひと・暮らしフォーラム(副島)が漁村女性活動の紹介と地域の水産物を利用した加工品の販売について、講演しました。

うみ・ひと・暮らしフォーラムとして、シーフードショーにまた参加していきたいと考えています。一緒に参加されたい方はご連絡ください!



● 地域ミニ・シンポジウム

奄美	2016年 11月	あなたの夢は何ですか? 動き出した自分たちの活動について 考えてみよう
奄美	2017年 5月	日ごろの自分たちをちょっと 見直してみよう ～まな板、包丁の管理どうしていますか?～

地域ミニシンポジウムは皆さんからの要望に柔軟に対応していきます。「こんな内容でもいいかしら?」と迷わずに、まずは私たちにご連絡ください!

一緒に内容を考えていきたいと思います。

● 出版物



2017年1月 Vol.8
2017年5月 Vol.9
2017年11月 Vol.10

うみ・ひと・暮らし
シンポジウム2016
in 静岡 報告書



うみ・ひと・暮らし通信への寄稿なども
お待ちしております。



皆さんからのアイデアや希望やちょっとしたヒントなどをお願いします。一緒に考えてまいります。



漁村女性グループが手作りする商品
それは 目の前にある輝くうみとあったかいひとたちに
育まれて暮らしを明るく彩る そんな商品です

おもわずほっこりした気持ちになれる
うみ・ひと・暮らし試食会で
うみと ひとと 暮らしをゆっくり楽しんでみませんか？

試食会は、他の漁村女性グループがどういうものを作って、
どのように売っているかを知るとともに、
訊いたり、教えたり、自分だったらこうするといった
意見などを交換する場です。
今回も、漁村女性グループが、様々な地元産品を元にして開発・
改良した旨いもの、珍しいものが提供され、
試食会会場は活気に満ちました。



JF 紀州日高女性部
(和歌山県御坊市)

紀州あかもく

あかもくのネバネバ成分にふんだんに含まれるフコイダン。
「紀州あかもく」は固形の状態でも8割近くがフコイダン、
また体内でその効果を発揮するために
貴重な役割を持つ成分フコースも含まれる「美」になる海藻で、
海のスーパーフードとして売り出し中です。

和歌山南漁業協同組合田辺女性部
(和歌山県田辺市)

ごまさばのみそ漬け

紀伊水道で獲れたごまさばは脂があり、
昔ながらみそ漬けで焼いてお食べください。



和歌山南漁業協同組合湊浦女性部
(和歌山県田辺市)

あじ寿司

旬でなければ食すことができないお寿司です。



しらす釜揚げ

動力を使わず人の力で獲る伝統の
引き寄せ網漁のしらす。
漁法の違いをお楽しみください。



新庄漁業協同組合女性部
(和歌山県田辺市)

ひじきめし

ひじきと梅のごはんです。
女性部のひじきを使用し、梅も自家製です。



和歌山県漁連・JF和歌山女性連
(和歌山県和歌山市)

まぐろ缶の巻きずし

紀州勝浦産の「生まぐろ」を地元の海水塩で整えた、
薄味ですが、しっかりまぐろの美味しさを感じることができます。



福井県漁業協同組合女性部連合協議会
(福井県福井市)

しまジャコ天

そのまま食べられます。
煮物などにアレンジもできます。
保存期間は冷蔵で2週間です。
地元おい町大島で獲れた魚を使っており、
地元の道の駅や農産物直売所で販売しています。



鯖へしこ

鯖のへしこは、鯖を糠漬けにしたもので、
福井を代表する特産品の一つです。
食べ方は、糠を落として生のまま
薄くスライスする刺身、焼いてご飯にのせる、
おにぎり、お茶漬けにしても美味しいです。



株式会社梶賀コーポレーション
(三重県尾鷲市)

梶賀のあぶり

生木のマキを燃やして直火で焼きながら
火でいぶした魚の保存食です。



じんべえばばーず
(高知県土佐清水市)

サバの姿ずし

今が旬のサバー本を使った姿ずし。



魚のチーズ揚げ

魚嫌いの人でも食べられます。
関西テレビでとりあげられました。



合同会社漁村女性グループめばる
(大分県佐伯市)

パン de ごまだし

大分県佐伯市の郷土料理ごまだしを、
パンに合うようにアレンジしました。茹でた野菜にも合います。



東町漁業協同組合女性部
(鹿児島県長島町)

ぶり大根味付

「鯛王」の切身と柔らかく煮込んだ大根の相性は
抜群で、骨まで食べられます。



イワシの梅酒煮

梅酒でイワシの臭みを取り、
山椒味のピリッとした佃煮です。



鯛王のアヒージョ

女性部が女性目線で作ったぶりのアヒージョです。
「鯛王」の切身を、オリーブオイルとガーリックの
風味豊かなアヒージョに仕立てました。



会場風景





中本 京子 氏

和歌山県漁協女性部連合会 会長
(和歌山県)

和歌山県田辺市出身。和歌山南漁協女性部部长、和歌山県漁協女性部連合会会長、JF全国女性連理事等を務める。

平成29年3月から地元である和歌山南漁協湊浦支所の荷捌き所を活用して、新鮮なシラスを提供する食堂を開店し、人気を集めている。



藪 江津子 氏

和歌浦漁業協同組合 女性部長
(和歌山県)

和歌山市和歌浦出身。和歌浦漁業協同組合女性部長、和歌山県漁協女性部連合会副会長等を務める。

「やぶ新」を起業、和歌浦湾で獲れるシラス等の加工販売や交流施設「おとっと広場」朝市で「しらす丼」等の提供を行う。地引網漁体験や魚食普及活動でも活躍。



下野 尚登 氏

長浜漁業集落 代表
(鹿児島県)

鹿児島県薩摩川内市下甕島町長浜生まれ。兵庫県で育ち、24歳で島にUターン。親の仕事を手伝った後、32歳で独立。現在、自営漁業経営で、エビ底曳き網中心に家族でエビ加工まで行う。

長浜漁業集落グループの中の若者と年配者をつなぐ役目を果たす。



香取 弘子 氏

全国漁業協同組合連合会 漁政部
(東京都)

東京都出身。全国漁業協同組合連合会漁政部。2010年からJF全国女性連・JF全国漁青連事務局、全国青年・女性漁業者交流大会等を担当。「漁村女性の皆さんの魅力にどっぷりハマっています。」

口メの養殖事業は、作る漁業を漁業生産の中に組み入れることができ、将来の漁業の在り方を模索する中、大変意義あることでした。しかし当初は、消費者から、どのようにして食べるのかという質問が相次いだことから、女性部がヒロメの普及を買って出ました。弁慶市はじめ、スーパー、デパート、大阪の物産展まで出掛け、店頭でヒロメの実演販売を行いました。今も、毎年京阪神のスーパーで店頭販売を行っています。

平成元年に和歌山県JF女性連は、魚食普及に積極的に取り組んでいくということとを、事業として採択し、その最前線の普及員として、各漁協の女性部員をおさかなママさんに任命しました。そこで、私たちは、魚好きは子どもの時からではないか、子どもに魚の良さを分かってもらおう、未来の消費者を確保しよう、子どもたちに魚の料理を教えに、近くの中学校や高校に行き、魚のさばき方を教え、生徒たちと一緒に料理を行いました。

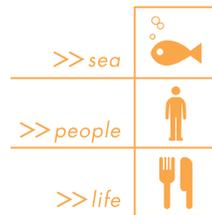
後日、中学校、高校の生徒たちからもらった感想文の中から、一つずつ紹介します。まずは中学生のものです。イカの筋のような骨を見たときは、イカはこの一本の骨しかないから、あれほど滑らかに、ゆらゆら泳げるのかなと思いました。魚は骨があつて硬かったり、ぬるぬるしていて切りにくい場面もあったが、初めての割には上手にできたと思いました。これで、魚のさばき方が大体分かったので、少しは家で手伝いができると思います。アジの骨や頭などでみそ汁のだしを取ったりできるということを知りました。魚について、より多くのことを学びました。このことを生かし、これからのいろいろな魚料理に挑戦していきたいと思っています。

続いて、高校生です。私は魚を触ったのは初めてで、自分でできるかなと心配でした。魚をさばくときは、内臓や血が出てくるから怖いし、気持ち悪いし、自分には絶対無理とか、魚はスーパーでさばいたものを買えばいいと思いました。アジを三枚におろした時、初めはうまくいかなかったけれども、二匹目は自分なりにうまくできたと思いました。イカの切り方を教えてもらって、目玉が取れた時は少し怖かったけれども、イカで作った春巻きはとてもおいしかったです。初めに自分には絶対無理と思っていたのに、今ではもっとやりたかったと思っています。

高校生は家庭科で全員女子でしたが、中学生は男の子も包丁を握りました。昨今、男女共同参画社会の構築が叫ばれていて、少しは啓発に役立ったでしょうか。今、食育ということが重要だといわれています。子どもたちは塾や習い事があり、また親が共働きで、家族がみんなそろって食卓を囲むということが、少ない時代なのかもしれません。小さい時からファストフード的なもので育ってきた子どもたちは、大人になっても、この食生活を疑問視することなく、そのまま次世代に引き継いでいくような気がしてなりません。

食の大切さということは、農業、畜産業、漁業の全てを含んだ話です。そして、私たち漁業者の立場でできることが、魚食普及の活動なのです。小さい時から魚に触る。触らせるよう心掛けてもらい、魚を買ってくるときは、なるべく一匹丸ごと買ってきて、家で料理をするようにして、子どもに魚の原型を見せて、名前も教えてやってほしいと思っています。歳時記にもあるように、魚には季節があります。魚の素晴らしいところを分かってもらい、旬の魚を食卓に乗せてもらえれば、大変うれしいです。

時々、町で出会うお母さん方から、あの時子どもに魚の料理を教えてくれたので、よく手伝ってくれるというのを聞くと、本当にうれしくなります。今年度も十回ほど、学校でおさかなママさんの料理教室を開催する予定です。このように、おさかなママさんの活動を通して、学校をはじめ各種団体にお邪魔して、魚食普及活動を行ってききました。それで、成果はどうだったのかと問われれば、今のところは分かりませんが、ただ、未来を担う子どもたちが、お魚はおいしいと思ってくれて、将来自分の



みんなでトーク

家庭で、魚料理を食卓に上らせてくれることだと願うばかりです。

一方、私たち漁業者の環境はどのようなのでしょうか。組合員の減少、漁業者の高齢化、漁獲量の減少など、大変厳しい状況に置かれています。私たち女性部も活動を行う中で、水揚げの減少は、家計を直撃する重要な課題です。一番の心配事といっているでしょう。以前、信漁連や行政から、魚をメニューとした店を出したらどうかという話がありました。でも、その頃は、地元船の水揚げもあって、浜に活気もあり、将来を見据えての食堂の経営は考えられませんでした。しかし、近年の地元船の水揚げの減少に加えて、カツオ船も減り、漁獲量も少なくなってくる中、何とかならないかと思いました。

びに食べています。食堂をするなら、この自慢のシラスを使って、しらす丼ぶりや一般の人に食べてもらったら、喜んでくれるのではないかと思います。

食堂を開設するに当たり、肝心のシラスがいつも確保できるかどうかという問題があります。営業日にシラスが必ず獲れるとは限りません。まして、漁獲量が減少している昨今です。冷凍しなければならぬという課題に直面しました。そこで方々に視察に行き、冷凍保存の方法も教わってきました。もう一つ、市場に水揚げされたものは、全部競りに掛けるという仲買との取り決めがあります。船から直接買うことはできません。仲買に話し、競りの前に先取りすることを了解してもらいました。

開店の日は慣れていないこともあり、目の回るような忙しさでした。県、市の職員さんをはじめ、多くの方が来てくださいました。お客さんで来てくれた町内婦人会の方たちが、文字通り飛び入りで手伝ってくれました。初日は、予想を超えた三百食を売り上げました。開店してからは半年がたちました。これからも、いろいろな問題が起こってくると思いますが、みんな

と仲良く元気に解決していきながら、頑張っていきたいと思います。(拍手)

後継者とともにシラス漁と観光地曳網

藪 皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介賜りました、和歌山市の和歌浦漁港から来た藪江津子です。

和歌浦というところは、紀伊半島の北部にあります。万葉集にも歌われた風光明媚な場所です。先日文化庁が認定する日本遺産に「絶景の宝庫 和歌の浦」として選ばれました。

和歌浦湾で、私どもはシラス漁や観光地曳網を営んでいます。シラス漁は合計三隻。総勢四名から五名の男性で行います。テンマと呼ばれる船のリーダーでシラスを探し、そのポイントを、アブネと呼ばれる網船二隻で網を曳き張り、漁を行います。獲れたシラスを、すぐにテンマが港まで運びます。港に運ばれてくると、陸で待っていた私たちの出番です。まずは、船から約二十キロのシラスが入った箱を、いくつも運び上げます。大漁の時など、百個近くに

なる場合もあります。それを近くの加工場まで、台車に乗せて運びます。私どもは、新鮮なうちにお客さまにおいしく食べてもらうことがモットーなので、多く獲れた場合は、予約分と当日販売分を確保し、残りは別の加工業者に買い取ってもらいます。加工場に運んだシラスは、あらかじめ沸騰させておいた二つの釜で、すぐにゆでます。シラスの大きさ、季節、その日の天気、温度や湿度などを考え、ゆで時間、塩の量を微調整しながら、手作業で行います。ゆでたシラスは釜揚げシラスと干しシラスに分けます。釜揚げシラスは水切り程度ですが、干しシラスは天日干しをします。その際、シラスをゆでる作業と同様に、干し加減が難しく、経験が重要です。シラスはパックに詰めて、全国各地から注文を頂いている分の発送準備や、店頭販売分に仕分けをしています。加工場が販売所を兼ねているので、五名から七名のスタッフで、加工とお客さまへの販売を行います。

シラス漁は娘婿に任せ、私は加工場で全ての作業の段取り、スタッフの配置などを行った上で、主に釜揚げの作業を担当しています。幸い、娘や息子の嫁が加工場を手

伝ってくれ、またその友達がパートに来てくれているので、意思疎通はうまくできていると思います。みんないい人たちばかりで、楽しく仕事してくれています。

お刺し身やバーベキューで食べてもらうというサービスです。今までは、団体ツアーのお客さまや、法人の福利厚生レクリエーションなどでご利用いただくことが多かったのですが、最近は、学校の遠足や修学旅行など、体験学習としてのご利用が増えました。事前の幹事さんとの打ち合わせや準備を私が行いますが、当日の船の網の準備や、獲れた魚の調理、バーベキューの手伝いなどは、若い漁師たちが行います。

せていただくことが不慣れなため、お聞き苦しい点が多々あったと思います。最後までご清聴ありがとうございました。ちなみに、私の主人は、長年和歌浦漁協の組合長をしていましたが、現在は漁業をする意思はないようで、漁の経験を生かし、iPadを片手に、おか漁師として、シラスではなく珍しいポケモンを探しています。ありがとうございます。(拍手)

集落みんなで起業

下野 皆さん、こんにちは。甕島漁協長浜漁業集落の下野です。私の住む薩摩川内市下甕町は、鹿児島県本土西方約三十八キロに浮かぶ甕島列島の南部に位置し、人口が約二千人の町です。ボンビーガール柴田美咲ちゃんの放映で、皆さん聞いたことがあると思います。ボンビーガールで、私たちのエビのイベントの取り組みが放映されたこともあり、甕島では、キビナゴ刺し網、パシヨウカジキ流し網、定置網、一本釣り漁、深海エビ底曳漁など、沿岸漁業が盛んです。

私は三十九歳の時に、地区内では二ヶ統しかない、好漁であったタカエビを漁獲する、小型底曳網漁を開始しました。平成十七年度の、離島漁業再生支援交付金事業が始まった時に長浜漁業集落を発足し、集落のみならず地域の振興と活性化に向けて取り組み始めました。国からの補助金を使って未来につながる活動支援をするのが目的でした。各離島の皆さまが取り組むような活動を実施してきましたが、目標とした漁村の活性化は進まない状況でした。

もっと将来につながる活動をすべきだ

と思います、二期目となる平成二十二年程度からは、地元のエビを活用した加工品作りの取り組みをすることになりました。それと同時期に、国の補助を受けて、いろいろな施設が整備されて、地域おこしの課題を協議する産地協議会も発足しました。いろいろな支援をもらえることになり、加工が進むことになりました。選別時に出る小さなエビを使った商品加工に力を入れました。エビ入りさつま揚げ、エビが原料のふりかけなどを、鹿児島大学の水産学部、薩摩川内市役所、観光協会、商工会議所などの協力を得て開発しました。出来上がった商品を、水産関連のイベントなどで、会員全員で交代で試食販売すると、予想外の人気で、あつという間に売り切れて、喜んでしまいました。マスコミにも取り上げてもらい、商品が問い合わせに間に合わないぐらいのブレイクをして、組合の電話対応がパンクしたこともありました。

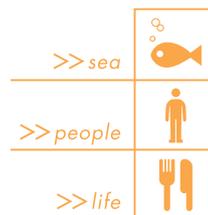
私たちのメンバーは約三十二名。協力人数を入れると五十名近くです。年齢が二十代から七十代後半まで、孫とおじいさんのようなメンバーで構成されています。世代が違うメンバーが、一致団結して港の活性化を目指しています。

また、離島再生交付金を活用しながら、先進地視察として、対馬と種子島、各地域にいるいるなところへ勉強に行きました。先方さんも快く受け入れてくれ、いろいろなことを導入することになりました。おかげで、将来に期待を持てるような成果をすぐく挙げています。現在は、エビを中心としたイベントなどを開催して、観光客の誘致も含めて取り組んでいます。以上です。(拍手)



お客さまに喜んでいただけていると思います。天候に大きく左右されるので、テレビやネットでの天気予報とにらめっこしながらの段取りは大変です。また、お客さま相手のサービスのためアクシデントもあります。来ていただいたお客さまたちが自然の中、掛け声を掛けながら網を引っ張ったり、生きた魚に触れたり、バーベキューでおいしそうに魚介類を食べている様子を見ると、本当にやりがいを感じます。

以上が、日頃の私の仕事ですが、こういった場でお話しさ



みんなでトーク

地域の若手を育てる

香取 皆さん、こんにちは。JF女性連の事務局を担当している、全漁連の香取と申します。本日はこのような貴重な機会をいただきありがとうございます。こういう大勢の前でお話しした経験がないので、途中で何を言っているか分からないとか、意味不明な部分、聞き苦しい点があるかと思いますが、広い心で、最後までお付き合いいただけたら助かります。どうぞよろしくお願いいたします。

今回は、JF女性連の活動について、ご存じない方が多いと思うので、簡単にご説明させていただきます。その後、今年一月に立ち上げたJF全国女性連フレッシュ・ミズ部会のことや、活動事例としては今日のシンポジウムのテーマに沿って、若い方の取り組みについてご紹介していきたいと思えます。

JF全国女性連二〇一七年度の活動スローガンは「できることから始めよう」それが輝く未来の第一歩 JF女性部一仲間の輪をひろげて、活動も地域も明るく元気な一です。活動の基本方向は、一、東日本

大震災被災地支援活動。二、自立した組織づくりと女性の参画の機会づくり。三、浜の環境保全活動。四、水産物消費拡大活動。五、安全操業の推進。六、全国共通活動の推進となります。

それでは、具体的に何をやっているのかというと、主なものとして、被災地支援活動では、全国漁青連と連携して各種イベントに出店し、被災地の食材を使った料理の試食や、風評被害払拭（ふっしょく）のため水産物の安全・安心をPRするなどしています。

浜の環境保全活動では、全国女性連ブランドのせっけん「わかしお」の使用推進と、メーカーによるせっけん講習会の実施推進や、海藻おしぼ教室を、海を守る青少年体験教育活動と位置付けて、年に二〜三回開催しています。

水産物消費拡大では、各女性連さんが実施した料理教室やイベントへの費用助成などです。

安全操業の推進では、ライフジャケットの着用率百パーセントを目指して、ライフガードレディースによる取り組みや、安全講習会の開催等、着用推進の情報発

信、主に旗振り役を行っています。

全国共通活動の推進では、海難遺児募金活動などに協力しています。

基本方向の中でも、JF全国女性連では、男女共同参画の推進と部員の高齢化・減少対策を重点推進項目に掲げ、取り組んでいくこととしています。どちらの課題もハードルが高く、成果が一朝一夕に表れるというものではもちろんないですが、高齢化・部員の減少対策については、今年の一月に立ち上げたフレッシュ・ミズ部会のメンバー、今日も参加

していただいています。そのメンバーをキーパーソンとして、今後部会を充実・発展させていきたいと考えています。若手のアイデアや行動力、情報発





信力をフル活用して、将来指導的地位へ成長していく若手の育成や、ネットワーク構築への取り組みを推進する。簡単に言えば、仲間をつくらうということですが、女性部活動や漁村地域の活性化につなげていければいいのではと考えています。

まず、男女共同参画の取り組みについてです。今年四月二十八日に、水産基本計画が閣議決定されました。基本計画というの

は、水産に関する施策の総合的・計画的な推進を図るために、五年に一回見直しが行われます。この新基本計画には、水産業における女性の参画の促進という項目が設けられ「漁村・水産業分野の特性を踏まえつつ、政府の第四次男女共同参画基本計画に関する目標の達成に向け、漁協系統組織における女性役員の登用についての自主的な目標設定及びその達成に向けた普及啓発等の取組を推進する」と明記されています。この部分について、今後水産庁からどのような指導があるか分かりませんが、JF全国女性連では、男女共同参画についての対策として、意思の疎通を図るために、各JF役員と所属女性部役員との懇談会等の実施を推進しています。

また、JFグループ運動方針というものがありませんが、その中には「女性部とJF経営層との間で定期的な協議の場を設け、女性部におけるJF経営への理解の浸透を図る」。その後、例えばオプザーバーとしてのJF経営の参画を通じて、女性の意思反

映を図り、計画的に理事に登用する等、段階的に取り組む」という文言が、何と記載されています。その記載内容の実現に向けた対策を協議することとしています。

あとは、女性連役員と水産庁長官、全漁連役員との懇談会の実施を通して、女性の声の反映に努めたりしています。また、JA女性部との交流として、JA女性リーダー研修会に参加して連携を深めるなどしています。男女共同参画については、女性連の中でも温度差があるし、JAと同じように進めていくには、男女共に意識の改革が必要だと思えます。ただ、今の世の中、もうそういう時代であるということ、女性が発言しやすい、意見が反映されやすい環境づくりは大切なので、女性部の方々に引き続きお伝えしていかなければいけないと思っています。

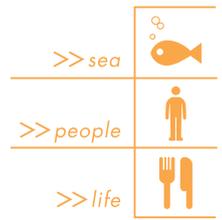
部員の高齢化・減少対策は、日本の人口が減少していく中で、漁業者女性部員も減少していくのは、ある程度しょうがないのかと思います。女性部数が一九八七年がピークで千四百十五部あったものが、二〇一六年に六百七十部に減少。部員数は一九六一年の二十二万七千人をピークに、二〇一六年は三万六千人。ピーク時から十九万人も減少しています。ここ数年は微減で推移していますが、漁協合併も減少していく要因の一つと聞いています。

今回、各県女性部員の年齢別構成を調査しました。初めての試みだったので、対応できなかった県もあり、合計が部員数に合いません。次回は完成度の高いデータにしたいと思います。このグラフを見ると、やはり女性部活動の中心を担うのは五十代、六十代、七十代の方になっています。思っ

ていたよりも若い方が多いので、驚いたというか、少し安心したような気もしました。

続いて、ここからはフレッシュ・ミズ部会の立ち上げや、第一回目の部会のご報告をしながら、二つほど若い方の活動事例を紹介したいと思います。よく若い方は、子育てや勤めているので活動に参加できないと、いろいろなところで耳にします。そのような中、部員の減少をどう食い止めたらいいたでしょうか。これは、若い方に入っていただくしかありません。JA女性部の研修に参加させていただくと、フレッシュ・ミズという組織が、全てではないが各県に存在して、研修会の中でもフレッシュ・ミズが報告するなどの場面があり、明るく元気で、とてもいい印象を受けました。ならば、JFでもやれないだろうかと当時の女性連役員さんに相談して、立ち上げることにしました。いざ立ち上げるとなると、準備や予算の面も大変でしたが、東京水産振興会さんにもご支援いただき、関先生にもサポーターとしてご協力いただき、今年の一月に五十歳以下の若手をメンバーに、JF全国女性連フレッシュ・ミズ部会を立ち上げました。多分、立ち上げが一番大変だったのが、各県の人選だったと思います。推薦していたいただいた、女性連会長・事務局さんには、心から感謝しています。

部会の設置目的ですが、漁協女性部の活動や地域を活性化するためには、次世代の担い手育成が不可欠です。高齢化・部員の減少対策としても、若手女性部員が集う機会をつくり、多種多様な研修を受けることにより、意識・能力の向上、リーダーシップ等の習得を図ります。また、同世代の仲



みんなでトーク

間が学び合い、話し合うことで、情報交換・共有するなど、人的ネットワークを構築するとともに、リーダー、若手が互いに切磋琢磨することにより向上する、循環型のJF女性部を目指すとしています。先ほども言ったとおり、仲間をつくらうということです。

第一回フレ・ミス部会には、北は若手、南は宮崎まで九人の若手が参加してくれました。皆さん、初めは何で呼ばれたのかも理解できないという感じでしたが、関先生のコーディネートにより、ディスカッションしていくうちに、やはり若い方はすぐに仲良くなっていました。今回は、それぞれの地域の漁業や女性部の実態、女性部活動に對しどう思っているのかを意見交換する中で、若手が参加しやすい女性部の在り方や、若手が参加しない理由を理解する機会となりました。また、隣同士の地域でも、どのような活動をしているのか知らないなど、地域でのコミュニケーションが不足しているという実態も分かり、年代別交流会の開催の要望が出るなど、想像していたよりも積極的な提案がいくつもありました。参加された方も、少しリップサービスもあ

るかと思いますが、参加して収穫があったとか、有意義な会だった、また参加したい、地元の女性部の良さを認識できたなど、大変喜んでいただきました。これからも人選の苦労は付きまとうと思いますが、立ち上げた以上、続けていかなければいけないし、よりいい会に発展していけるよう頑張りま

す。皆さんも、温かく見守って応援していただきますよう、よろしくお願いします。続いて、若手女性の取り組み事例を二つご紹介します。一人目は、熊本県天草市の益田沙央里さんです。今年三月に開催された、第二十二回全国青年・女性漁業者交流大会で、養殖クルマエビの販路拡大に向けた取り組み——養殖クルマエビ発祥県の誇りを胸に——という発表をして、流通・消費拡大部門で水産庁長官賞を受賞されました。クルマエビ養殖を行っているところに嫁いで、四人のお子さんを産み育てながら、パソコンやIT技術を活用して、自社の特別な餌にこだわったクルマエビのちらしを自分で作成し、何万枚ものちらしを自らポストイングしたり、ホームページやネットショップ、ダイレクトメール、フ

リーペーパーなど、あらゆる媒体を駆使して市場に出していたクルマエビに加えて、個人向けの独自販売による売り上げを、わずか五年で二百五十万円から三千万円にまで増加させた方です。まさに女性の活躍、あるいは女性の輝く活動のモデル的な姿だと、交流大会の審査員の先生一同をすごく感銘させた取り組みでした。

一人目は、大分県佐伯市蒲江の橋本千春さんです。この方は、起業をされていて、Gran Primaveraというところの代表で、フレ・ミス部会の部長さんです。取り組み内容は、嫁ぎ先の水産会社でウニを扱っていて、中には商品として使えないウニがあり、何とか利用できないだろうかと思ってお

り、おしょうゆ屋さんでそのような話をしたところ、うにじょうゆを作ろうという話になり、委託して作ることになりました。うにのつぶつぶを残したいとか、うにの色にこだわりたいなどと試行錯誤の結果、こちらのUNI GOLDといううにじょうゆを誕生させました。二〇一四年には、おんせん県おおいた 味力おもてなし商品最優秀賞を受賞、翌年には、むらおこし特産品コンテスト食品部門、中小企業庁長官賞を受賞しています。蒲江と楽しいこと、わく

わくすることが大好きな方で、四人のお子さんのお母さんです。いい意味で、みんなを楽しいことに巻き込む能力を持ったすてきな方で、ご自身も平成二十八年大分県女性のチャレンジ賞を受賞しています。若い方がこの方と知り合うと、刺激を受けるのではないかと感じています。

九月十四日、十五日、東京で第十八回JF全国女性連フレッシュ・ミス・プログラムという研修会を、これは水産庁補助事業ですが、開催します。この研修会は、毎年原則四十五歳以下の若手を対象に、地方で開催していました。そのような若い子はいないという批判を浴びながらも、同じ補助事業であるグループリーダー研究会との差別化という点から、その原則で実施して

いました。今回フレ・ミス部会が立ち上がったことから、部会の年齢に合わせて五十歳以下の方々で開催します。JF全国女性連の活動に関する紹介は以上です。(拍手)

関 どうもありがとうございます。この四人を中心に、今日はみんなでトークをしていきたいと思えます。まず私のほうから、四人のパネラーの方々に質問をさせていただきます。と思っています。

自分たちの活動の継続が若手の参入の基になる

中本さんは、漁協の女性部さんとして、ずっと活動をされてきました。そして、今は意を決して、食堂の営業を始められたわけです。一年前に静岡でシンポジウムをした時に、ちょうど中本さんが食堂をやるかどうかと迷われていたのです。ですが、静岡のシンポジウムに出て、私やるわと言ってくださって、シンポジウムも一つ背中を押すきっかけになったのかなと、少し思っています。中本さんに質問ですが、中本さんのところでは、若い人の参加はどういう状況になるのかということと、そのことに対して、ご自身ではどのように思っているかということをお聞きしたいです。

中本 女性部ということだけを言うと、まず結婚されていない男の人が近くにいるので、その人たちがみんな結婚してくれたら、多分女性部はできると思うのです。でも、職業柄沖へ行かなければならないので、ひよっとしたら女性の方と出会う時間が少ないのかもしれませんが、独身の方が多いので、女性部に入ってくる人が少ないのではないかと思います。もちろん若い人もいますので、一緒に何かしませんかと誘うのですが、私たちの若い時分とは違って、今の方はパートと言えども、本職の人と変わらないぐらい、きちんと時間で勤めて仕事をされています。今日はどうですかと言っても、すぐには休めないだろうと思うので、なかなかそこに参加するということは難しいと思います。でも、私たちが女性部を続けていくうちに、その方も同じよ

うに年がいくつくるので、定年もくるだろうし、またご主人の浜を手伝うことにもなるでしょうから、取りあえず自分たちが続けていくことが、若い方も入ってくる時の基になるという大変な言い方ですが、その時のために、やはり継続してやっていくことがなと思っています。

自然の中で仕事ができる魅力

関 敷さんのところは、お嬢さんとその旦那さんが、やぶ新さんのお仕事を一緒にやっておられます。お嬢さんの旦那さんは漁業と全く違うところから入ってきているのかなと思うのですが、敷さんから見て、漁業のどのいうところに、義理の息子さんやお嬢さんは魅力を感じておられるのでしょうか。

敷 とにかく海が好きだと思います。自然の中で仕事ができるということと、来てくれていると思います。収入の面では、決していいほうではないと思います。でも、タコつぼや刺し網や定置網などを組み合わせてやっているの、何とかいけているのではないかと思えます。娘婿さんは、今、アサリ事業をやるということと、青年部の若い人たちを引き連れてやりだしたところ

関 実は、明日視察に行かれる方は、今話していた敷さんのお嬢さんのお婿さんから、お話を聞くことができます。今日は敷さんが、年上の立場から若い人を見た話を聞くのですが、明日は、若手の人が入っていった経緯などを聞かせてもらえると幸いです。ありがとうございます。

暗示にかけて関係性を構築する

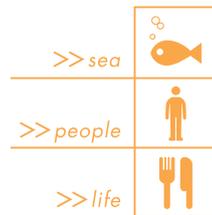
下野さんは、集落の人たちと一体となって、起業活動をやっていくということと、実践されているわけです。集落の中にはもちろん若い人もいますし、年配の方もいるということだと思のですが、若い人と年配の人をつなぐ役割を、多分下野さんはやっていたらいいのかなと思います。その中で、苦労をしている点と、こういう工夫をしているということがあれば、教えてください。

下野 私たちのメンバーは、若手といっても二十代から四十代は十名くらい、あとは五十五歳以上です。この地域も一緒だと思のですが、放っておくと、若者と年寄りと二つに分かれます。これでは、活動が全然成り立たません。私は代表をさせていただいているのですが、代表の仕事というのはみんなの輪を広げるようなことが、役割だと思っています。

若者には、私がもう一回三十代ぐらいに返って、先輩方と交流していたら、もっと水揚げが上がったかな

ということを繰り返します。そういった暗示にかかっています。年寄りは、放っておくと未来がないので、過去の自分の栄光しか語らないのです。ですから、若者の前では思い出話と自慢話は言わないでくれとお願ひしています。そのようなことが普通の人が言ったら怒られてしまいますが、口頃の付き合ひのおかげでどうにか、おまえが言うのなら仕方ないという感じ





みんなでトーク

で、聞いてもらえました。そんな風に両方の世代に暗示をかけると、結構若者と年寄りと一緒に、おまえたちは若いからそれをしろなどではなく、年寄りも率先して、若者がするようなことをしてくるので。一線に立って、力仕事なども。鹿児島県内でも結構私たちの活動は注目されていて、あそこはよく頑張っている。大した結果は残さないけれども、少し参考になるという感じではいつもいわれて、注目されていると思います。

関 ありがとうございます。暗示にかけると、毎日聞いてみると、本当にそのように思ってくるかなと。そういう中から、いい関係性というのをじっくり出しているというの、下野さんが一番担っている、大きな役割の一つなのかなと思います。

若手は今行わたいことを見守っている

関 香取さんは立場上、主に漁協の女性部ということを中心に活動している。取り組がなくなっていくわけです。そうはいっても、女性部だからとか女性部ではないからなどは

あまり関係なく、やはりどういう部分でも漁業や漁村の中で、若い人たちが少し見にくいという状況はあるのかなと思います。そういう中で香取さんは、フレッシュ・ミズ部会という新しい企画を考えて、それを実践されています。そうやって、実際に少し見えにくかった若手の女子たちを集めて、いろいろな意見交換をしたときに、若手に対してどのような思いを持ったかというところをお聞きしたいと思います。

香取 最初みんなに会ってお話を聞くまでは、若い人は女性部活動などには興味ないのかなと思っていました。今までのいろいろな会議で若い方の様子の話を伺った限りでは、地域というよりも自分たちの家のことの方が断然大事に思っている世代なのかなと思っていました。みんなに集まってお話を聞いたら、そのようなことは全くなく、その世代で地域のことも考えているし、女性部活動のことも考えていらっやいました。

今中心になっているのがリーダーさんたちなのですが、リーダーさんたちが活躍しているから、一歩引いて、このような言い方をおかしいかもしれないけれども、ある

意味リーダーさんたちがやっていることを見守っているような感じを受けました。ああやって、旗振り役がいなくて駄目だねという感じで、一歩引いて見守っています。自分たちがそこに出ていくよりも、リーダーさんにやっていていただいたほうが、うまくいくのではないかと印象を受けました。ただ、リーダーのやっていただくことを自分たちも受け継ぎたいし、あとは自分たちの提案、例えば伝統料理の教室なども、自分たちの料理法を広めていくのいいよねというような話もしていました。

関 ありがとうございます。私もフレッシュ・ミズ部会では、一緒に参加させていただいたのですが、若い人たちだっただけで、やっぱり自分の暮らしている地域のこと、それそれに思っているし、そこで何とかしなければと思っているのだなということをつくづく感じました。ただ、それを何とかしなくてはという、何とかするやり方が、やはり若い人は若い人のやり方や思いがあるだろうし、今までずっとやってきた人はその思いややり方があるだろうし、そういうところがあるのかなと思います。それが、実はあまり話をする機会がなかなか

か取れなくて、少し誤解というほどでもないけれども、何か分り合っていない部分もあるのかなということ、少し感じました。ありがとうございます。

地域の中に、自分の仕事を作る

中川 三重県尾鷲市から来ました、中川美佳子です。今日は、組織の肩書は梶賀コーポレーションという社名で参加させていただいていますが、元々は地域おこし協力隊として、尾鷲市に採用していただいています。去年の春までは東京でサラリーマンをしていて、金融の会社に勤めていたのですが、協力隊として、尾鷲市の梶賀町という、人口百五十人ぐらいの漁村で、今は住み込んでお仕事をさせていただいています。

仕事の内容というが、採用された時に市役所から言われたテーマは、梶賀町に伝わる食文化を、元々商品として売り出しているのですが、もっとしっかり商品開発に力を入れて、販路を拡大していくという、いわゆる六次産業化の支援をするという仕事で入らせていただきました。町のほうでは、もう十年ぐらい婦人会の方を中心に商品を

作って、いろいろなイベントに売りに行くというところまでされていたのですが、そこにいらしていただきました。去年私が入った時点で、もう活動十周年で、NPO法人にしたいというのを皆さんが言われていたので、せっかくだから株式会社にしちゃうというところで、今年の五月に会社を立ち上げて、食品加工と販売をやっています。町自体は大敷き網、定置網の町で、そこ

で獲れた魚を使って、いろいろな商品を売り出してほしいということをや市役所や町の区長さんから言われているので、今そういう仕事をさせていただいています。地元のいわゆる漁師のお母さん方に生産と商品のパッケージ詰めまでお願いしています。商談や、商品のパッケージデザインなどを、私ともう一人デザイナー出身の協力隊の二名で役割分担して、支援していくということをやらせていただ

べていけるようにしたいです。三年の期間が終わっても町にはとどまって、尾鷲市中で活動したいと思っています。

関 ありがとうございます。そうすると、彼女の場合は、自分で仕事をつくっていているということなのですが、そのように仕事があると、若い人もその地域の中で暮らしていけるし、地域に残りたいとか地域にいたいと思えば、できるということですよ。

活動したことへの対価は重要

中川 そうですね。今日のお話で、前にいらっしゃる皆さんにぜひ質問したいと思っていることがあります。先ほどの下野さんのお話に通じる部分なのですが、若い人がいろいろ稼げないと、なかなかその地域には住めなれないと思っています。私は去年引越して、町の方にいろいろ新しいことがしたいですと言った、皆さんすごく手伝ってくださいなのですが、基本ボランティアでやってくださることが多いのです。

例えば、何かをよそに売りに行くので一緒に売りに行ってくれませんかと言って、時給幾らでお願いしますという話をすると、そのような水くさいことを言わないで、ただで付いていってあげるからということを言われます。正直、年金をもらっている方はそれでいいかもしれないですけども、若い人をアルバイトで雇いたいと思うと、きちんとお給料を払って、お仕事として成り立たないとということころがありま

す。今度そうすると、若い人たちは、自分

で、少し心苦しいとなってしまったり、やはり仕事としてすぐアンバランスかなと思います。

ボランティアの方が優しい気持ちで、ボランティアでやってくださるのはすごくうれしいのですが、きちんと仕事として対価がもらえるような形で、うまくやっていける方法にならないと、若い人をこちらも採用したいというのが言いつらい状況で、そういうお金で人を雇うというところ、うまく行っている事例や、もしくは皆さんの中で苦労されている部分があれば、お伺いしたいです。あとは、時給の部分で、私が入る前は、町の方は時給五百円という規定で働かれていたようなのですが、やはり私の目から見ると安過ぎないかと思ってしまっているので、最低賃金を払いましょうと今させていただいています。お金の部分でうまくいっている事例や課題などがあれば、教えてください。

補助金が終わったとき、どう活動を維持するか

下野 私たちのところは、国の離島再生交付金を使っているということで、各イベントは全部有料でやっています。その資金の中から、時間と日数とで時間幾ら、半日やれば幾らなど、最大一日で八千三百円です。ですから、そういう問題はありませんが、ただ、日当が出ないときは少し人が集まりにくいなど、補助金がなくなるときに、果たして今のような盛り上がり方が維持できるかというのが心配です。

あと、地域おこし協力隊をされていますよね。うちもこの活動がすごく成果が



ています。協力隊は最大三年まで採用していただいて、一年ごとに更新なので、人によっては、一年で辞められる方もいらっしゃいます。私は三年続けたいと思っています。

その後は、取りあえず会社をつくっているの、そちらから収入を得られればいいなと思っています。今は会社からは収入を頂いていなくて、市役所のほうからお給料を頂いているので。あとは六次産業化という取り組みの事例にはなるので、そういうのを他の町の方にもいろいろ伝えられるような、プランナーの仕事も最近始めたので、その二つで食



みんなであそぶ

>> sea

>> people

>> life

した。地域おこし協力隊の方に、すごく協力してもらいました。紹介の中で少し省いたのですが、彼らの都会から来た感覚や、デザインの才能など、それがなかったら私たちの地域は盛り上がりがないというのがあります。今でもすごく感謝しながら、協力をしていただいています。

関 例えば女性部活動を考えた時に、やはりボランティア的な活動が主だと思います。そういう中で、若い人たちが時間を使って活動しても、対価がないと厳しいのではないかと。女性部活動にどうして若い人が入ってこないのかというときに、必ず出てくる話かと思うのですが、その辺りは実際どのような感じなのでしょうか。

報酬は人を集める

中本 私は女性部に入って、もう半世紀以上になります。自分のところで網元をやっている、母親が女性部をやっています。学生時分から私も活動を手伝っていました。その当時は、女性部の田舎などは、多分二百円か三百円くらいだったと思います。女性部自体はいろいろなことをやって

いました。年金の集金をしたり、国保を集めたり、郵便局の簡易保険を集めたりということ、かなり女性部自身がお金を稼いでいました。ですから、個人に払うお金は少ないけれども、女性部に集まったお金で、自分たちではできない楽しみ、例えば今年近くのごこかへ行こうとか、健康器具を買おうというふうなことでやってきました。それが、市からそのようなことは駄目だといわれるようになって、今度は自分たちでお金を稼がなかったら、女性部自体が動けないというか、資金がないというか。組合からも景気のいいときは助成金をたくさんもらっていましたが、なかなかそういうこともできなくなりました。女性部も何かしなかったら、みんなが集まる機会が少なくなるということ、お金になるいろいろな用事を頼まれば何でもやっていきます。そうやって女性部の資金を集めて、みんなも今日はこれだけやったからこれだけもうかったと。これでどこかへまたご飯を食べに行こうとか、旅行に行こうということ、できてきました。

漁業が少なくなってきたので、今は女性部さんが働いた分、家計の足しにとまでは

いれないが、現金で渡すようになってきました。自分たちだけが楽しむことに使っていたことが収入になる。とにかく現金を持って帰って、家に今日はお母さんもこのようなことをしてきたと言えるような感じになってきました。

今はたまたま食堂というものを始めて、まだ県の最低賃金には満たないですが、やはり少しでも対価があると集まりやすいと思います。

収入とお金以外の満足度とのバランス

関 ありがとうございます。お金の意味が変わってきているというところもあるのかなと感じました。敷さんの場合は、家自体が商売ですから、その辺りはシビアだと思います。先ほど敷さんが、収入はそこそこでも海が好きだし、収入だけで測れない部分の利点と、収入と兼ね合わせたときに、その人の評価の中でそれで満足が得られれば、漁業はいいということなのかなという

聞き方を私しました。どのようなお給料制なのかは分かりませんが、お金の面で若

い人たちが納得するような配分をどのようにされているのかなというところです。

敷 船は娘婿に任せて、地曳き網や他の仕事を手伝ってくれたら、取りあえず若い子たちが収入を得てくれたらいいので、私は少し残して、うちを手伝ってくれている漁師の子や店の女の子に渡しています。自分たちはもう二人で食べていけたらいいので、とにかく若い子に続けていってほしいので、なるべく余分に渡しているつもりです。

関 起業や仕事としてやる部分と、女性部活動は同じ土俵で話せない部分ももちろんありますが、若い人呼び込むという意味は少し共通するところもあるかなと思います。このような話をしています。

香取さん、香取さんは女性部さんのあちらこちらでの活動を見ていると思います。その中で、変わってきたと思うようなことはありますか。女性部活動が変わってきた、特にお金ということに絡めて変わってきたと思うことがもしあれば、教えてください。

香取 もうだいぶ前になりますが、愛媛の宇和島、遊子漁協女性部さんが、一回全部

なしにして再出発しましたよね。あの時に、若い方が、やる気のある人たちがやっていこうという時に、やはり資金を支払いました。そうすると、若い方も活動に参加しやすくなる、おうちを出やすくなるという話を聞きました。

から頂いています。もうっていない方が「えっ」と言っていて、少し荒れるかなということがありました。女性部活動はお金をもらってやることではないという意見があったので、それこそ温度差ですよね。私個人としては、やはりもうボランティアでやることはないのではないかという気はします。お叱りを受けてしまうかもしれませんが、そういう気がします。

今日は田舎をもらえて良かったという、やはり喜びたいと思うし、両方かけていくのがいいのではないかと思います。出てきても全然何もならないというのは、これは隣の人は働きに行っているのにということにもなると思います。お金になる部分と、自分の楽しみや、自分自身がそのことによつて何か得るところがあると思うので、それと両方掛け持っていて、そこをこまやかにくのが一番いいのではないかと思います。それもケース・バイ・ケースで、いつもそれほどというわけでもないでしょうが、両方いるのではないかと思います。

考えています。これから若い人を入れていこうとか、新しい人が入ってくるとなるときに、今までの関係からまたシフトしていくことを、考えなければいけないときが、必ずどこでも来るのかなと少し思っています。

新規参入によって働き方を見直す

関 ありがとうございます。呼び込むために、お金の話にだんだんなってきたわけですが、この辺りどうですか。他の皆さんの経験や考え方があれば、ぜひ教えてほしいです。

中本 両方だと思っ

ています。お金もやはり必要だし、お金ばかりで動いてもどうかと思うところもあります。ですから、仕事の内容によつて、みんなのためというよりは、むしろ地域のためになることであれば、それは当然お金が付かなくてもいいと思うし、みんなで何かを作って販売したり加工して、それを仕事としてやったときには、

関 ここにいられている方で、リピーターというよりは、自分の起業として活動をされている方が多いと思います。ですが、そういう起業を何年も一緒に見させていたただく中で、女性の起業活動は、私はそこに意味があると思っています。お金も大事、だけれども、それだけではない。そのことをやることで、地域や地域の漁業など、そういうところを熱く語れる人たちが、そういう活動をやっていると思っています。それが、すごく価値だと思っています。

理想はそこなのですが、やはりその両方の部分で、どうバランスを取ったら、みんながニコニコできるかというところは、グループそれぞれ目標によつていろいろ違うも出てくるかなとも思っています。でも、同じメンバーですとやっていると、そのままでいいかもしれないけれど、違う人を入れていこうとか新しい人を入れていこうとなったときに、今まで持っていたお金と気持ちのバランスが、少しずつ変わってくる場合もあるのではと

新木 石川県で輪島海美味工房をやっています。去年から私が違った活動の事務局の方に活動の重点を置くようになって、他のメンバーに加工の負担が少し掛かってきたので、今年の四月から一名加わってもらいました。その方は、パソコンもできるし、事務的なこともできるし、加工もできます。元々漁業の町の出身で、少しパートで勤めていた方で、六十歳で定年になったので、よそから声が掛かるより先に、こちらから声を掛けました。

元々関わっていた三人は、少しずつ年金で一万円か二万円上乗せがあればいいねといいながら、大きな借金を突然抱えたので、その返済に負担を大きくしながら、年金プラス大体二万円ですべてやってきました。そして今日新しい人に来てもらうことになったので、仲間と話し合いました結果、仲間は現状維持でいいけれども、今来てもらう人は大事な人だし、ずっと続けてもらいたいということ、大体労働基準法の時給の基本プラス、わずかですが私たちの気持ちを支えています。そして、仕事は時給なので、なるべく三人で相談して、能率的に。今まで六時間働いていたものを、家に帰って家事もできるよつに、働く時間を大体四時までにはしました。それから、若い人に働いて





>> sea



>> people



>> life



みんなでトーク

もらうときは、やはり土曜日と日曜日を休みにしないと、なかなか入ってきてもえないので、月曜日から金曜日の間に、より短時間で能率的な仕事をし、みんなが助かるような方式をみんなで考えて今やっています。

毎月の私たちの売り上げは、買ってもらわないと収入が入りません。毎月の売り上げをみんなにきちんと報告して、大体自分たちは一年間でこれだけの稼働率があるということとを計算しながら、無理なく長く続く、そして楽しいということと、それから、先ほど関先生が言われたように、やはり漁業者の女性しか伝えられない、温かい手作りの商品作りを目指す。それから中本さんにお

尋ねしますが、女性部の構成メンバーは百五十二名ですよね。そこで、今年から食堂をやられたわけですが、勤務体制や経営主体はどうなっていますか。大体女性部で食堂をやっていると聞きますが、経営主体は誰ですか。実際的には、漁協が経理を一切やっていて、自分たちがどれだけ収入を得ているのか分からない女性部が多いです。ここは大事なところなので、独立採算制なのか漁協主体なのかというのを聞きたいと思っています。

中本 部員さんが百五十二名というのは、五つの漁協が合併した、和歌山南漁協という女性部です。漁協食堂をやりましたというのは、元々私は湊浦というところですが、湊浦の女性部だけでやりました。私のところが軌道に乗ってきて、他の地区のみんなが賛成してくれたら、それぞれの地域のいろいろなものを持ってきて、一緒にやりたいなという希望はありますが、今のところはまだ始めたばかりで、自分のところだけです。

今、おっしゃるように、組合の市場を借りています。古い倉庫のようなところがあったので、そこを改造してやり始めまし

た。お金については、国の補助金や市の補助金をもらいながら、あとは自分のところの自己負担金だけでやっています。昔からずっと長いこと女性部をやっていて、少しかかりました。女性部から貸してもらったような格好になって、そこのお金と補助金を合わせて始めました。

仕入れから商品は何を売るのが、いくらかで売ることかということも、とにかく組合は一切関係なく、自分たちだけでやっています。電気やお水を使うといったそういうものは漁協さんに協力してもらいながらやっています。月幾ら売り上げて、その中から給料として払います。材料の仕入れもメニュー作りもみんなで寄って決めたりしました。今のところは女性部の、それも有志的な人だけでやっています。

賃金が払えることは地域貢献

吉村 私たちも、立ち上げた時は、百九十四名の女性部全員で立ち上げました。最初はボランティア的なことです。とにかく地域を見渡したら、独居の人がたくさんおられて、生きるためには何が必要かというのを

考えたときに、やはり食べることでないかということ、取り組んだ事業です。

最初は、本当にそういう小さな地域を守ることだけで始めました。長いことボランティアをしながら地域を支えています。が、やはりそれでは出てくれる人が面白くないということになりました。出資方式を取ろうということで、出資金で一人一百万円をお願いしたところ、四十二名集まりました。その出資金を元に、事業を拡大していったという経緯があります。

最初はボランティアでしたが、少しずつ商品を作ったり、その販売により、お金が少しずつできたので、最初は時給二百円、それから三百円、四百円、五百円。そういう時代が随分長く続いたのですが、平成二十二年に道の駅ができて、そこにレストランができることになりました。私たちは、全くそこに携わる気持ちはありませんでした。店子(たなこ)で入るぐらいの気持ちはありませんが、食堂をやらないかというお話が来たので、そこでみんなで集まって話し合いながら、では食堂をやってみようとなった時に、株式会社をつくりました。

その時に、取締役を五名ほどつくりましたが、いつも取締役で話し合いをしませんが、事業を進めています。今は大体、年間六千万円を少し上回るぐらいの売り上げを挙げています。でも、六千万円売り上げたからといって、すごいと思われるかもしれませんが、私たちは地産地消をすごく大事にしていて、材料代が半分、人件費が半分、そのような会社の経営状態です。ですから、会社としてはもうかっていないが、賃金が払えるというところは、地域に大きな貢献をしている、地域活性化にすごく貢献し

ているのではないかと思っています。

漁協との関わりですが、全然漁協とは関係なく、漁協の一室を加工場として、家賃を払って借りているという状況にはありません。漁協が貸してくれる場所があるというだけでも、とてもいいことです。そういう協力は受けているが、きちんと家賃を払って、電気、水道、全て自分持ちでというのが私の自慢です。女性部だけで経営しているという経営形態なので、これはいつも私が自慢して話をしているところです。

今、レストランのほうに十五名、弁当・総菜を作る加工場のほうに十三名という体制で経営していますが、レストランは、漁協女性部だけでなく、地域全体が元気になるなければいけないという思いが、取締役の中全員にあり、地域から十五名を雇用しています。私たちが何もしなかったら、山口県萩市三見という小さい集落は、つぶれるかもしれないという、そのぐらいの自負を持って、今活動をしています。

塩屋 三見シーマザーズで会計や仕入れを担当しています。今、代表が言ったように、地域を何とかしなくてはいけないというのが私たちの考え方です。今私たちのメンバーの平均年齢は六十九歳です。八十歳を超えた方もいるし、七十代、六十代がほとんどです。若い人は今四十代が一人、五十代が二人、あとは全部六十歳以上です。私たちの今一番の課題は、若い人が入ってこないことです。二〜三日前から、私も事務の關係で労働基準監督署に行っているが、やはり若い方は賃金です。市内から十キロ離れているが、やはり若い人は、車で皆市内のほうにばっと出掛けます。私たちは後継者問題がとて課題になっています。

す。私たちの会の合言葉は「退職したらいらっしやい」です。これをテーマに、一生懸命頑張っているところです。以上です。

関 今どちらかというと、若い人を呼び込みたい側の人たちにずっと話を聞いています。今日は若い方もたくさんみえているので、呼び込まれる若い人という、若い人の立場からも意見を聞きたいと思っています。

若い人は仕事や子育てに追われている

境田 広島県で夫婦で力キの養殖業をやっています。近年だったら、魚も不漁といわれるように、力キの出来もだんだん難しくなってきたり、後継者がいなくて辞めていく力キ屋さんも何軒かいます。いつになったらお嫁さんをもらおうという人がいたり、女性部も私が一番若いぐらいで、みんな本当におばあちゃんぐらいの人たちも残っています。本当は若い奥さんを入れてくれたら、もっと若い人が盛り上がり、いろいろなことができるのにと言っているのですが、きちんとしたところで働いていて、仕事忙しい、子育てが忙しい。

野さんの集落の人で、今日どの辺りに座っ

ていらっしやいますか。

毛井 若者ではなくてばか者なのですが、正直自分も四十代なので、若くもないかもしれないですが、今日発表した下野さんの長浜漁業集落に参加させていただいています。実は、薩摩川内市の役所の職員で、下野さんにいつもお世話になっています。今回どうしても来いということ、一緒に参加させていただきます。

甌島ということで、地元では漁協さんや高齢者を扱う養護施設など、どこも二十代、三十代の方が少なく、かなり全体としては人手不足なところがあります。長浜漁業集落は、先ほどの下野さんの発表のとおり、若い人と、まだ下野さんより上の七十代の方々と、下野さんが中心になって輪をつくっているという、チームワークで、他の漁業集落よりもまとまりがあるということ、若者がいろいろな意見を出して、今活動を行っているところです。

今の若い人たちが、自分たちで新しい漁を見つけて出しています。今いろいろな経験や情報を仕入れ、同じ魚でもいかに高く売るか、流通体制や、今まで鹿児島県の県漁連のほうに出荷していたのを、築地のほうまで送ったり工夫をして、若い人たちもいろいろな頑張っています。

若者に興味を持ってもらうような活動を続ける

吉田 由比港漁協の吉田と申します。私たちの由比港漁協では、比較的若者が多いのではないかとという意見がありました。私が考えるところでは、上の世代の方は役員



>> sea

>> people

>> life

みんなであそぶ

が回ってくるという時期を見越して、突然にお嫁さんと世代交代して役を逃れるという実情です。意欲があつて、私頑張りわという形で若手が入っているのではないと思ひます。ただ、そういう若手をいかに取り込んでいくかというのは、中本さんがおっしゃったように、今まで引き継いできた事業、活動を、淡々と続けることによつて、リーダーとして引つ張っていくことによつて、若者に興味を持ってもらい、自分たちがだんだん中心のメンバーになっていくことが大切かと思ひられます。

それと、シーマザーズの退職者よつぞ来てくだささいというお話から、私の経験を少しお話しします。私は三十歳ぐらいで夫の父が急逝したので、夫とサクラエビ漁業を引き継ぎました。その当時、うちの乗組員は、私たちの親より上のような世代が年金をもらつて乗っているのが実情でした。その方たちが船を降りると、やはりまた年金世代が乗ってくるという状況でした。しばらくすると、社会がだんだん変わり、サーフィンが大好きな人が漁業者として入りました。これまでは乗組員の方を夫がバスを運転して港まで送らなくてははいけませんで

した。でも、若い人は自ら運転して来てくれます。船の免許も持っているということ、私たちはとても喜びました。力もありません。その時間帯に来て一生懸命働いてくれます。これほどいいことはありません。

世代や分野を超えた連携

吉田 こういう若い人は日中はサーフィンを謳歌して、夜私どもの漁業にやつてきます。漁業だけでは食べられないので、年末にはだて巻き屋さんへ行つたり、お茶農家へ行つてみたり、いろいろなところへ行つて、それなりに収入があれば、自分の趣味や実益を兼ねて、生活を謳歌しています。

少し話は変わりますが、六次産業化を全部漁業者で成り立たせるなど、そういう話も私には大変だと思ひます。やはり協力隊のような方がマネジメントをしてくださるか、餅は餅屋で、連携していくようなことが大切だと思ひます。

関 今のお話で「あっ」と思つたのは、今回は若い人ということにターゲットを当てて、それをどのように取り込むかということとで話しているが、実は若い人も含めて、

地域の中にはいろいろな立場の人、いろいろな職業やいろいろな年齢や、性別も違つたり、いろいろな人が実はいて、そういう人たちを、この人たちだけというのではなく、もつと間口を広げて取り込んでいくということも、一つ大事なことで、活動の幅を広げるといふ意味では、実はそういうことも大事なのではないかということ、今吉田さんのご意見から私は感じました。それは下野さんの活動につながるかな、と思ひます。

下野 やはりこの活動がないと、若い世代と親の世代、おじいさんの世代が交わることはなかったと思ひます。若い方は若い方だけで、港の端のほうでわいわい。そして、年寄りはまだ遠う端のほうで昔話に花を咲かせるようなイメージが、うちの港も例外でなく、それが当たり前でした。

この活動を通じて、日当を稼ぐということも大事なのではないかと、交流ができて、自然と若者と年寄りが交流すると、漁師ではない人たちも、漁師が元気だということ、話でも聞きたいという感じが生まれてきて、結構交流がすごく地域を挙げて活発になったような気がします。

他所から来た人が、地域活動を担う

関 ここにいる方たちも、そういう方がたくさんいると思ひます。もともと漁家の方であれば、全く漁業と関係のないところからその地域に入ってきて、結婚が主だと思ひうのですが、漁業の世界に入つて、そして今があるという人たちも非常に多いかなと思ひました。

そうすると、実はそういう人たちは、元々漁業と関係ない人だったのが、今は最も漁業と深く関わる、漁業目録で物言つた人たちになつていくわけですが、そういう人が増えていけばいいな、と思ひました。藪さんも、実は漁業とは関係ないところから結婚されて、漁業に関わるようになってたんですね。最初はどうか。戸惑いなどはありましたか。

藪 そうですね。朝は四時前に起きないといけないし、上の人のお弁当は作らないといけないし、それは大変でした。今は子供三人を育て、漁業を自分の仕事として没頭できるようになりました。

関 他所から漁村に入ってきて、今やすつかり漁家の女性だという人たちが、この会

場にもたくさんいらつしゃると思います。入ってきた時、もちろん今もお若いと思いますが、もつと若かった時に、ぼんとその土地に入ってきて、どのような感じ方をしたか、それが今どのように変化しているかという辺りを少し聞いてみたいと思います。

白間 奄美から来ました。奄美小町の白間です。元々主人は島の人間でした。何を思ったのか田舎に帰って、漁師をしたいというのでついて来ました。漁師も漁も何も経験がない、東京で育ったので、はい来ましたというので、魚の解体も知りませんでした。最初にやったのは、瀬渡し船です。

その後近場の魚から始まって、今は本格的な漁師で、キンメダイを釣っています。私はそういう魚を食べて、今小町で食堂をしています。おかげさまで、魚の味が少しは分かるようになったので、それを参考にしながら、島の魚の料理をしています。

島には熱帯のきれいな魚がいますが、中には毒のあるものも結構います。それを気にしながら料理をしています。島なので天気が非常に悪いことも多く、月に二週間ぐらいしか営業できません。ほとんどは、刺し身をメインにしているので、天気が悪いときは強気で休んでいます。何で休むかといえは、天気が悪いし、魚は高いからできませんと言って休んでいます。

起業しているメンバーは、上は七十六歳下は四十七歳で、五名です。あとはたまに若い漁協職員さんが、魚の解体などを手伝ってくれます。みんな楽しみながら活動していますが、それがやっつけいける秘訣だと思っています。東京で食べなかつた魚を奄美に来て食べているのが特権です。今はすっ

かり島人です。島の美味しい料理を食べ、真ん丸になりました。色も黒くなりました。

子どもが三人いて、二人は女の子です。上の娘は魚の解体ができます。下の娘にも教えるのですがしません。同じ子どもなのに、同じようにしているつもりなのですが、何ですかね。できるのてできないのがあるというのは。それと同じように、仕事をするのも向き不向きがあると思うので、先ほどどこかの人が言っていました、が好きこそ物の上手ではないですが、やはり仕事も興味があれば来るというので、やはり興味を持ってもらいたいです。

諏訪 奄美大島からはるばる来ました。何カ月も前からわくわくしながら今日を待っていました。私たちのほうも上は七十代が多くて、私が六十過ぎてグループの中では若いという感じでやっています。若い人を呼びたいし、後継者づくりというのをすぐ考えてはいるのです。売り上げが伸びていると、若い人を入れてそれなりの賃金が出せます。先ほど白間さんがおっしゃったように、好きだから入ってくるのではなく、やはり若い人は生活がかかっているの、それなりの補助がある時には、若い人も何人か入ってきたのですが、それが終わるとやはり次の仕事に行ってしまうというふうな繰り返しで、今までやってきました。結局最後に残るのは、やはり前からやっていた人だけというのが現状です。すごく課題だと思います。どのようにして若い人を呼び込んだらいいのか。それも、皆さんのいろいろな意見を聞いて参考にしたいと思います。

きちんとした給料を払う

桑原 私は自分で起業していて、平成十六年からごまだしというのを作っています。最初のきっかけは、魚に付加価値を付けること。それから、地域の活性です。ちょうどその頃合併があり、鶴見という小さい所は巻き込まれて、なくなるのではないかとぐらいに思っていました。一市八町村で合併して、佐伯市になってしまったのです。鶴見という言葉もなくなってしまったのではないだろうかという危機感があって、起業しました。

先ほどから皆さん、最低賃金をとか、年齢をなどと言っていますが、私たちももう七十少前です。起業した時はまだ若かったのですが、気力・体力も落ちてきたし、あと何年続けられるのだろうか。メンバーは六人いますが、五人が同じ年代です。ということも、もう生涯あと三年、四年しかないわけです。去年若い人が一人入ってくれました。その若い人が入ったというのは、実際経営的には五人でできる仕事だけれども、若い人を入れないとこの先がないということで、少し無理をして入れました。

最低賃金、大分県の場合は七百五円です。来月から少し上がりますが、最低賃金を今支払って仕事をしています。最低賃金で働いて、私たちの年齢は年金があるのでそれで来てくれます。でも、今若い人は専業主婦が少なくなつて、みんな働かに行っているの、きちんとしたお給料が払えないことには来てもらえないと思います。きちんとした給料が払えるためには、私たちは自分の売っている物はもう少し

売れて、きちんと利益がないことには払えません。

私も去年からいろいろな商談会や外に對して販売を努力しています。この間はうみひとのおかげで、東京の商談会にも行きました。少し手応えがあったところも何軒かあります。帰ったらまた違う商談会にも行き、東京の商談会に行つて、空いた時間をぐるぐる販売先を回つて、あいさつをしてきました。物が売れないとききちんとして給料が払えませんが、給料を払えるように、若い人を入れるために、今私は努力しています。

私たちの年齢というのは、昔から働いてきたから働ける人も多いし、根性もあります。ただ、若い人の発信力や行動力、これはもう到底勝てないので、そういうのはどんどん入ってきて活躍してもらいたいと思います。と言いつながら、若い人とそうでない人の一線は今どこにあるのかと不思議な感じもしています。

ボランティアというのは言葉としてきれいですが、一回、二回はボランティアでできるが、やはり最終的にはお金になつてしまします。お金のことをあまり言う品のない話ではないが、やはり最終的にはお金になるかならないか。これが若い人を入れることではないかと、私は思っています。

いろいろな世代と一緒に 関われる活動

森岡 こんにちは。北海道の八雲町落部というところから来ました。森岡です。落部という町は、ホタテの漁が有名などで、ホタテと軟白ネギというネギを生産



みんなできーく

>> sea

>> people

>> life

して、農業と漁業が共同しています。みんな半農半漁ではなく、専業でやっている農家さんが多いです。私もネギの農家の嫁なのですが、ネギのパートさんに、ホタテの漁師のお嫁さんが来たり、ネギの生産農家のお嫁さんがホタテの耳づりを手伝ったり、そういう人事交流があります。今回はいかに若い人を呼び込むかということなのですが、農業も漁業も大体問題は似た事が多いので、私からすると、私は農村の女性ですが、漁村の女性とも共存しているような状況なので、一緒にやれるようなことがあればいいかなという感じで、そういう事例があれば聞きたいと思って今日は来ました。いろいろお金の問題など、本当に参考させていただきました。

パネリストの中本さんが、女性部のお嫁さんたちも、若い女性も女性部に入っしてほしいということを言われていましたが、私たちのところでも、女性部はありますが、やはり世代が違つとなかなか入りにくいなという、少し敷居が高いというか、結局六十代といえば私たちのお母さん、お父さんの世代の中に私がほんと潜り込んで、意見が出せるだろうかということも考

えると、もう少し世代が変わるまで待とうかなと思ったり、そのようなことがあります。でも、実際にはやはり高齢化が進んでいたり、人も少なくなってきたので、できれば下野さんたちのように、いろいろな世代の人がそういうのに関わっていきけるのが理想的かなと思って、少しまた女性グループに声を掛けてみようかなと思うようになりました。

関 どうもありがとうございます。実は、今回シンポの初めての試みなのですが、託児所をやっています。お子さんを連れて来られる会にしたいということをやりました。森岡さんはそこに、今日お子さんを預けてくださいました。本当にありがとうございました。

最後にパネラーの方に一言ずつお話を伺いたいと思います。

世代を超えた会話、交流

中本 今頃の年になったから思うのかなと思つのですが、やはり年齢を重ねた人と、若い人とは、昔の家庭のほつが部会とか市町村内会にしろ、子ども会にしろ、参加し

ていたと思うのです。おそらくそれは、それぞれの家庭に舅姑がおられて、自分の家の中だけでも、若い方の意見がなかなか通らなかつたのではないかと思います。ですから、若い人たちは、その町内会の婦人会にしろ、お寺の婦人会にしろ、いろいろな女性部にしろ、自分たちの意見に合った人と出会うと思つたら、そういうところに参加しなければならなかつた。家にいても、お義母さんの意見しか耳に入つてこないですから。でも、今は核家族になつてくるから、若い人だろうが何だろうが、自分の家庭は自分の意見そのまま動いているようなものです。もちろん、パートナーにもよるでしょうけれど。ですから、わざわざ出かけて行って、年を重ねた人の意見を聞く必要もないということなのかもしれない。でも、若い人の方から年齢の違う人のところに行つて、いろいろな話を聞くことも、放つておいてと言われるかもしれない。あなたが、なにか役に立つというか、身になることもあるのではないかと思います。私たちも若い人たちに声をかけて、話をしたいと思います。

世代交代で若手に任せていく

藪 私はずっと今まで、朝早くから夜遅くまで働いてきたつもりです。少し体力もなくなつてきたかなと思ひだして来たので、一時間でも二時間でも早く仕事を終わるようにして、若い人たちにだんだん任せていって、今度は手伝つほつに回ろうと思つています。まだ、仕事はするつもりですが、徐々に若い人たちに譲つていこうと、世代交代をしていくつもりです。ありがとうございます。

下野 女性部に若い方が参加してくれないとか、若い方が少ないということは、聞いてすごく実感として私も思いました。私のところも例に漏れずに、嫁問題が深刻です。若い方だけではなく、六十代、七十代でもこのまま独身で死んでいくのではないかと、こういうような、本当に見えて切なくなつたところ。皆さんのところもどうなのか、うちのところはこういうやり方をしたら嫁がたくさん来たとか、いい方法があれば教えてもらいたいです。よろしくお願いします。(拍手)

漁村女性グループの連携

香取 全国女性連は来年六十周年を迎えます。今の私の夢は、マルシェのようなものをやってみたいなというものです。皆さん加工や食堂などをやっているのです、そのときはぜひ参加してください。よろしくお願ひします。(拍手)

漁村で働きたい若手をどう巻き込んでいけるか

副島 私は水産大学校というところで講師をしています。最近、漁村女性起業のようなどころで働けるものなら働きたいという女子学生が結構出てきているなというのを実感しています。ただ、今日もあつたように、自分も自活していかなくてはいけないので、沢山でなくていいけれど、やはり最低限生活できるだけのお給料はもらえないと、というところで、泣く泣く諦めたような女子学生もいます。皆さんの活動を魅力的だと思って働きたいと思う若い子は確実にいるので、そういう子たちをどう巻き込んでいけるか、取り込んでいけるかというのが、本当に考えるべき課題だと今日お話を伺いながら感じました。

もう一つ、私の中で今日一番ヒットした言葉は、下野さんが最初に言った「暗示にかける」という言葉です。いろいろなどころで、自分自身にも暗示をかけながらやっていきたいと思っています。皆さん今から暗示にかかってください。皆さんとこれからもキラキラ頑張ります。来年また、うみ・ひと・くらしシンポジウムで、元気なお顔で会えるように、ここで暗示をかせて

いただきます。よろしくお願ひします。

関 皆さん、本当に長時間どうもありがとうございます。何ともまとまりがないですが、大事なことはたくさん出てきたかなと思います。私が今日すごく心に残っているのは、世代を超えた交流をするということが、地域や漁業をこれからも維持・発展させていくためには必要であるということです。世代が違えば、多分お金の意味も仕事の意味も違ってくると思います。だけれども、地域への思いや漁業などに対する、自分の仕事に対する思いなどは非常に共通する部分がたくさんあるということも、皆さんのお話の中から身に染みましました。若い人は若い人の技術や工夫があるし、年配の人は年配の人なりの技術や知恵を持っているので、お互いのないところを補いながら、もう少し広がっていくことができるのかなと思います。やはり、年配の人も若い人も、地域の宝だし資源だと思うので、そういう気持ちでお互いを認め合いながら一緒にやっていくことができればいいなと思います。

シンポジウムの記録は、まずは『うみ・ひと・くらし通信』でなるべく早く発信しようと思います。皆様にもお送りできると思っているので、それを読み返しながら、自分の地域を振り返りながら、何か新たな動きやチャレンジに結び付けていくきっかけにしたいだけだと思います。

今日は長時間どうもありがとうございます。(拍手)





多角経営で地元水産業を盛り上げる

「やぶ新」は、和歌山市和歌浦で漁業、シラス加工・販売、地曳網体験、観光遊覧船等、色々活動している経営体です。

横田邦雄さん(三十七歳)は、娘婿として「やぶ新」に新規参入。横田さんに「やぶ新」やご自身の取り組みのご紹介、若手としての思いやアイデアをお話いただいたほか、シラス加工場見学を行いました。

司会進行：副島久美

司会 横田さん、大勢の女性の前でしゃべるのが恥ずかしいと、すぐ緊張されていたのですが、今日は準備万端でやる気満々のようです。よろしくお願いします。

和歌浦との出会いは十九年前

横田 僕は今から十九年前の高校三年の夏に小学校の先輩から、片男波海水浴場の海の家アルバイトを紹介され、初めてこの和歌浦に来させてもらいました。僕はこの対岸の有田の下津という行き止まりの村で育ちましたので和歌山にこんな人が集まる所があるのだというのが和歌浦の印象でした。毎日が忙しく、たくさんのお客様や漁師の人々と出会い、人と触れ合う楽しさや温かさをその時に覚えたと思います。

高校卒業後は、建築・土木会社の現場監督として三年間働き、土木作業やデスクワークを覚えしました。その時に現場監督をしていなかったら、今の自分はないと思っています。現場監督で得た補助事業などの書類作成の知識は今でも活用できるスキルです。

その仕事を辞めた理由のひとつが、現組合長のお父さんにバッチ網に乗ってみなにかと誘われたことです。そのタイミングで結婚もしましたし、元々実家が海運業を営んでいたので問題なく転職できたと思います。漁師になって十三年目です。

僕が漁業に入った当時、この和歌浦には優しい漁師さんがたくさんいて、漁師の仕事を全然知らなかった僕に教えてくれました。彼らに教えてもらったことが財産となり、今につながっています。彼らは、海の家でアルバイトしていた時のスタンプでした。組合員が海の家をやっていたのです。

いろいろな活動 一駄目で元々、でもがんばる

漁師を始めたとき、和歌浦では観光遊覧船と地曳網もやっています。当時、地曳網が忙しかったので遊覧船は運行できず、また、維持費ばかりかかっていたので、廃業の話が出ました。しかし、この和歌浦の景色は最高にきれいなのです。それを多く

の人に見てもらいたいと廃業する遊覧船を譲り受けて、僕が主となって運航させてもらいました。廃業を考えていた遊覧船事業なので、駄目で元々です。今もそれを続けています。

その時、海運局や観光協会、ホテル・旅館を走り回って営業していたのですが、後から話を聞くとこの和歌浦というのは、漁師と旅館・ホテルがあまり仲が良くなかったそうです。僕は全然知らなかったのですが、漁師の人が頭を下げて営業に来てくれたということ、皆さんが協力してくれました。運航開始は正月の三が日で、観光協会がNHKの取材を取り付けてくれました。すると日に百余人の人がこの何も無い所に寒いなか足を運んでくれました。その時に乗ってくれたお客様の言葉、「やっぱ、景色最高や」「頑張れよ」で、ここまで頑張れたかなと思っています。

地曳網の後には、獲れた魚をバーベキューや刺身にします。今まで魚嫌いだった子が一番前に座って刺身をパクパク食べている姿を見ると、頑張って良かったな

と思います。振り返ってみると、人とのつながりとともに自分の頑張りを見て周りの人たちが集まってきてくれたのかなと思います。

最近、和歌浦ではシラスの加工見学や職場体験をする小学生や中学生が多くなっていますので、勉強会も開いています。シラスの水揚げを見てもらったり、船の装置やシラスの獲り方などを教えたりします。シラス加工場の見学では、生のシラスと釜揚げシラスを食べて違いを実感してもらったり、シラスに関心を持ってもらう機会を増やしています。

三年前から水産庁の水産多面的機能発揮事業対策等の事業(これ以降、「多面的事業」と表記)により、和歌浦干潟を僕たちで管理できるようになったので、子供たちと一緒に干潟で観察会や稚魚の放流をやっています。魚と触れ合い泥んこになりながら走り回る干潟での遊びや学びを通して、初めて分かることがたくさんあります。このような身近にある自然の大切さを皆さんに伝えていけたらと思っています。

資源を活かして地域や組合の課題にも取り組む

今では漁師は獲るだけでなく、計画的に休業日を決めて管理型漁業をし育てる漁業を目指しています。また、水は山から川・海へと流れてくるので、森林が大切であることを皆さんに伝えていきます。このような努力により、自然の恵みを絶やすことなく増やし、次世代に残していければと思っています。

和歌浦干潟にはアサリやハマグリ、カキの資源があるのですが、減少していることから潮干狩りの復活を目指し、若者が中心となりつつ組合員一同で頑張っています。保護ネットの設置やアサリ等を食べるツメタガイの駆除にコツコツと取り組んでいます。少しずつですが増えてきていますよ。うです。

その他にも高齢化や担い手不足など、組合や和歌浦地区として多くの問題もあります。和歌山県や和歌山市の人たちなど多くの方の知恵を借りて、今後について考えています。和歌浦干潟のアサリ、ハマグリ、カキと、和歌浦にはまだまだたくさん海産物が眠っていると自分では思っています。それら一つ一つを収入源にし、その収入を増やして若い人たちが生活しやすい漁業を目指しています。

この和歌浦には、おととつと広場や、東照宮、天満宮、片男波海水浴場があり、最高の景色や新鮮な魚があります。祭りでは和歌祭や潮まつり等がありますし、そして今年には日本遺産「絶景の宝庫 和歌の浦」にも認定され、観光も充実してきています。ですから、漁港だけではなく和歌浦地

区が一丸となって、漁業と観光の二つを基盤にして多くの人たちを呼び込んでいき、担い手となる若手を多く育てていきたいと思っています。以上です。(拍手)

質疑応答

司会 どうもありがとうございます。横田さんのお話、皆さんにすごく伝わったと思います。和歌浦は優しい人ばかりでこのは本当ですか。

横田 いや、実際に見てもらおうのが一番早いと思うのですが、見た目は少し悪いのですが、入ってしまつと皆さん優しい人ばかりで、最初のイメージとは全然違います。

司会 高校生の時に海の家でアルバイトをしたことが、やはりその後の横田さんの進路をスムーズにしたのでしょうか。

横田 大きかったと思います。

地域の資源ー貝やシラスー

A 三重県の者ですが、うちも貝やハマグリなどを育てているのですが、貝を育てる活動の様子を教えてください。

横田 一応発生しているのですが、食害が多く数があまり増えていないのが実際のようです。今まで三年間は勉強という感じでやらせてもらいましたので、今年ぐらいから動きだしているかと思っています。

B 水産祭りの時など生シラスはものすごく人気があるのですが、関西のほうでは意外と生は売れないと聞いたのですが、どうなのでしょう。

横田 僕らも静岡の生シラスを見に行き、生をやらせてもらっています。人気はある

のですが、クラゲが少しでも入ると、人が胃の中の物を全部戻すような怖いこともあるので、鮮度がいい品物の時でないとお出しません。ただ、生もおいしいのですが、加工屋もやらせてもらっている立場からは、やはり湯がきたてのヌクヌクのシラスがシラスの中で一番おいしいかなと思います。

新鮮な目で地区をみる大切さ

C 他所から来てく

れる人の目線や感じ方が違うということが、すごく重要なのが分かりました。私たちもそんな目を持ち、自分たちの地区のいいところを探ることが必要なのですね。ありがとうございます。

横田 ここへ来て新しいというか、田舎にはなかったものがたくさんあります。自分で楽しめないと人に教えられるのになと、まず自分が体験したり子どもたちと海に潜ったりしています。そのうえで、皆さんにその楽しいことを伝えるというのが一番伝わりやすいように思います。

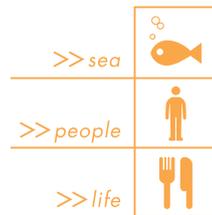
C やはり、若い人は行動が違うようですね。私は現実を見過ぎて楽しんでいないところがあるので、少し目線を変えようかと思っています。

は行動が違うようですね。私は現実を見過ぎて楽しんでいないところがあるので、少し目線を変えようかと思っています。

横田 僕らもお金がかかるとはあまり

できませんが、いま持っているものを活かしてできるものがあればいいなと思って頑張っています。ただ、その第一歩を踏み出すことが難しいですね。周りが付いてきてくれないとそれで終わってしまいます。皆





多角経営で地元水産業を盛り上げる

の意識が高まってきたらいいなと思っています。

司会 和歌浦は、同じ世代ぐらいの仲間が結構いらっしゃるのですか。

横田 そうですね。和歌山県のなかでは若い人が多い地区だと思っています。この地区では僕は若い方から五番目ぐらいです。僕より年上の人を引っ張るのが難しいです。上の人に動いてもらわないと改善しにくいので、いろいろと仕掛けています。

D 外から来た人が、新しい視点で地元の人気がついているという観光資源や食べ物に気づいて、これがいいのだということ発信していったと思うのですが、地元では価値があると思われていないものに価値があることを、地元の人に伝える方法はどこからしましたか。地元の人をはじめ絶対に受け入れないと思うのです。

横田 やはり自分が動くのが一番速いと思います。作って食べてもらうのはその漁師の人たちではなく一般のお客さんなので、一回それを出し、お客さんが「おいし」「と言えは、多分嫌でも分かってくれる」と思います。そして、それを利益につな

がるような形にしていけば、年上の人たちはついてくると思います。売れなくても駄目元なので、動くことが大事かと思っています。

司会 そうはいつでも、なかなかその一歩が踏みだせない人が多いと思います。その辺り、横田さんはスルッとやっているような感じがするのですが、なぜですか。

横田 その人たちにギャフンと言わせたいというのがあります。今まで言っていたことは実は違うのだということ言えば、うれしいというか。

司会 「俺、やったぜ」というか。

横田 そうですね。それを目指しているのですが、駄目だったら若いから甘えられるというか、「駄目だった」と言えば済むかなという感じでやっています。

イベント 一人を集めるのは難しいー

E この施設そのものは、どういう経緯で造られたのですか。

横田 僕は施設の経緯は分かりません。た

だ、イベントの始まりは、和歌浦に人を集めるのが難しいので最初は自分の工場に底曳網の魚を持ってきて販売したら地域の人が集まってくれたというものです。次第にシラス祭りなどの祭りにつながったのかなと思います。やはり人を集めることが難しかったです。一生懸命にやっていることで皆さんが来てくれ、続いているのかなと思っています。

E イベントをする時には、他の農産物なども連携するのですか。

横田 そうですね。賑やかにしてもらおうと、他の底曳きさんにも魚を直売してもらったり、地区の店の何軒かにも販売してもらったりしています。近くの東照宮で行われる和歌祭というものが、その前夜祭的な感じでやっています。

司会 朝市の頻度はどうですか。

横田 大きな祭り自体は、五月にこの和歌祭の前夜祭として一回やります。それと、十一月三日も日にち固定で、シラス祭りをやります。年配者によれば、十一月のシラスが一番おいしく、たくさん獲れるということなのでこの日に行っているそうです。

ただ、現時点ではシラスがその時もあまり量がなく厳しいです。珍しいのは、シラス屋さんが八軒並んで販売することです。多分、他のシラス屋さんは嫌がっていると思います。シラスの味比べができてお客さんには喜んでもらえているようです。

司会 隣近所の売れ行きが気になりますね。

横田 とても気になります。ただ、うちは新鮮なまま食べてもらいたいので、冷凍せずに冷蔵だけで販売し他と違うスタイルです。冷蔵品の傷みを避け、販売時間の早い段階でつくた煮などの違う製品に商品を切り替えているので、シラスがないことが多いのです。僕らはそれを売りにしています。ないときはないけど、その分、おいしい時においしい物を食べてもらいたいという気持ちです。

若い人を巻き込む

F 多面的事業の取り組みやお祭りなどをやる時に、主体になっている人たちは青年部さんですか。



東京水産振興会 紹介

“東京水産振興会”は、東京都築地市場に近接した水産物流通基地である豊海水産埠頭の管理運営を行うために設立された一般財団法人です。また同時に、水産業の振興に貢献するため、水産に関する普及啓発事業および調査研究事業を行っています。

具体的には、講演会の開催、水産政策や水産物流通、漁村活性化などについての実態調査と研究報告書の発行など、幅広い事業を実施しています。

●お問い合わせ

東京水産振興会 振興部（渥美、松田）

〒104-0055 東京都中央区豊海町5番1号

TEL : 03-3533-8111 FAX : 03-3533-8116

<http://www.suisan-shinkou.or.jp>
e-mail : tkyfish@blue.ocn.ne.jp



うみ・ひと・暮らしフォーラム

“うみ・ひと・暮らしフォーラム”は、漁村研究を志す女性3人が結成したグループです。変革期にある漁村の暮らしを見つめ、これからの漁村の向かうべき方向を見出すために、様々な漁村調査やシンポジウム開催などの活動を通し、情報提供やネットワーク形成など、現場での疑問や問題点の解決のお手伝いをしていきたいと考えています。

●うみ・ひと・暮らしフォーラム

関 いずみ（海と暮らし研究所・東海大学海洋学部）

三木 奈都子（国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所）

副島 久実（国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校）

<http://blogs.yahoo.co.jp/umihitokurashi>
e-mail : umihitokurashi@yahoo.co.jp